

◎ともいき講座「薬物への嗜癖(アディクション)と回復過程～当事者・支援者・住民とともに考える～」

当事者の声からアディクション問題の理解を深める

7月25日(水)に「薬物への嗜癖(アディクション)と回復過程～当事者・支援者・住民とともに考える～」と題した講座を実施しました。当日は、薬物依存回復施設の木津川ダルグ*代表の加藤武士氏をはじめ、木津川ダルグ、京都ダルグ、京都マックから当事者の方をお招きし、薬物依存の概要や体験談、ダルグの果たす役割等についてお話しいただきました。

最初に、主催団体「アディクション問題への新たなアプローチについての探索的研究」の研究代表者である松田美枝准教授(本学臨床心理学部)から、依存症・薬物依存症の概要を紹介し、決定的な治療方法はなく、日常生活の中で周囲に受け入れられながらゆっくりと回復していくと説明しました。その後、加藤氏から、ダルグやプログラムの内容について紹介いただき、依存者が抱える問題を提起されました。その問題は「孤独」である、と訴えられました。「孤独」が様々なものに依存する環境をつくります。加藤氏は排他的な社会の中では薬物依存の問題は解決できず、仲間や家族、地域とのつながり、様々な人間関係の中で自己肯定感を育み、本人が活躍できる場を共に作りあげていくことが重要であると、話されていました。また木津川ダルグ、京都ダルグ、京都マックから登壇いただき、ご自身が薬物を使用するに至った背景や回復に至るまでの過程、現状についてお話しいただきました。最後に、全体ディスカッションを行い、学生の立場からアディクション問題への理解促進のため、共に出来ることを模索したいといった声も挙がりました。



木津川ダルグ代表の加藤武士氏

*ダルグ(DARC)とは、Drug Addiction Rehabilitation Centerの略

◎ともいき講座「市民活動ステップアップ講座」

第1回「会員の獲得と定着について」を開催

8月5日(日)に、「市民活動ステップアップ講座『会員の獲得と定着について』」を実施しました。この「市民活動ステップアップ講座」は、市民団体、特に企業や行政、NPO、大学等の協働(パートナーシップ)に基づいて活動する団体、組織の活性化を目的とした全5回の連続講座です。8月5日(日)の第1回では、活動参加メンバーの獲得や、中心メンバーへの巻き込みをテーマに実施しました。



講座の様子

当日は、NPO組織基盤強化コンサルタント office musubime代表の河合 将生氏に講師としてご登壇いただき、講演とグループワークを行いました。

参加者のアンケートからは、講座への感想やご意見だけでなく、日々の市民活動について「参加者が少ない」、「若い人がいない」、「特定の人に偏っている」という実際の声を伺うことができました。今回の連続講座の実施では、こうした課題を把握し、解決に向かう一助となればと思っております。

●第2回目の市民活動ステップアップ講座『『伝わる講座』『ワークショップ』などの開き方について』は、9月13日(木)13:30～16:00 宇治産業会館にて開催します。ご興味・ご関心がございましたら、京都文教大学フィールドリサーチオフィス(電話：0774-25-2630 / メール：fro@po.kbu.ac.jp)までお申し込みください(参加無料・要事前申込・定員40名)。

イベント開催のお知らせ

子どもからご年配の方、障がい当事者や留学生など、様々な人が集い、交流できる地域のみなさんを対象とした大学開放イベント!

ともいき(共生)フェスティバル 2018

- 日時:2018年12月8日(土) 10:00～16:00
- 会場:京都文教大学 サロン・ド・パドマ 他
- お問合せ:京都文教大学フィールドリサーチオフィス

※参加無料(物販、模擬店等を除く)



京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニュースレター **ともいき** TOMOIKI vol.15
2018年8月発行

「京都府南部地域 ともいき(共生)キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。



平成30年度 地域志向教育研究 ともいき研究助成事業(住民参画型/産官学協働型)
平成30年度 地域志向協働研究 共同研究プロジェクト
**地域を志向した研究を推進！
地域とともに研究に取り組みます**

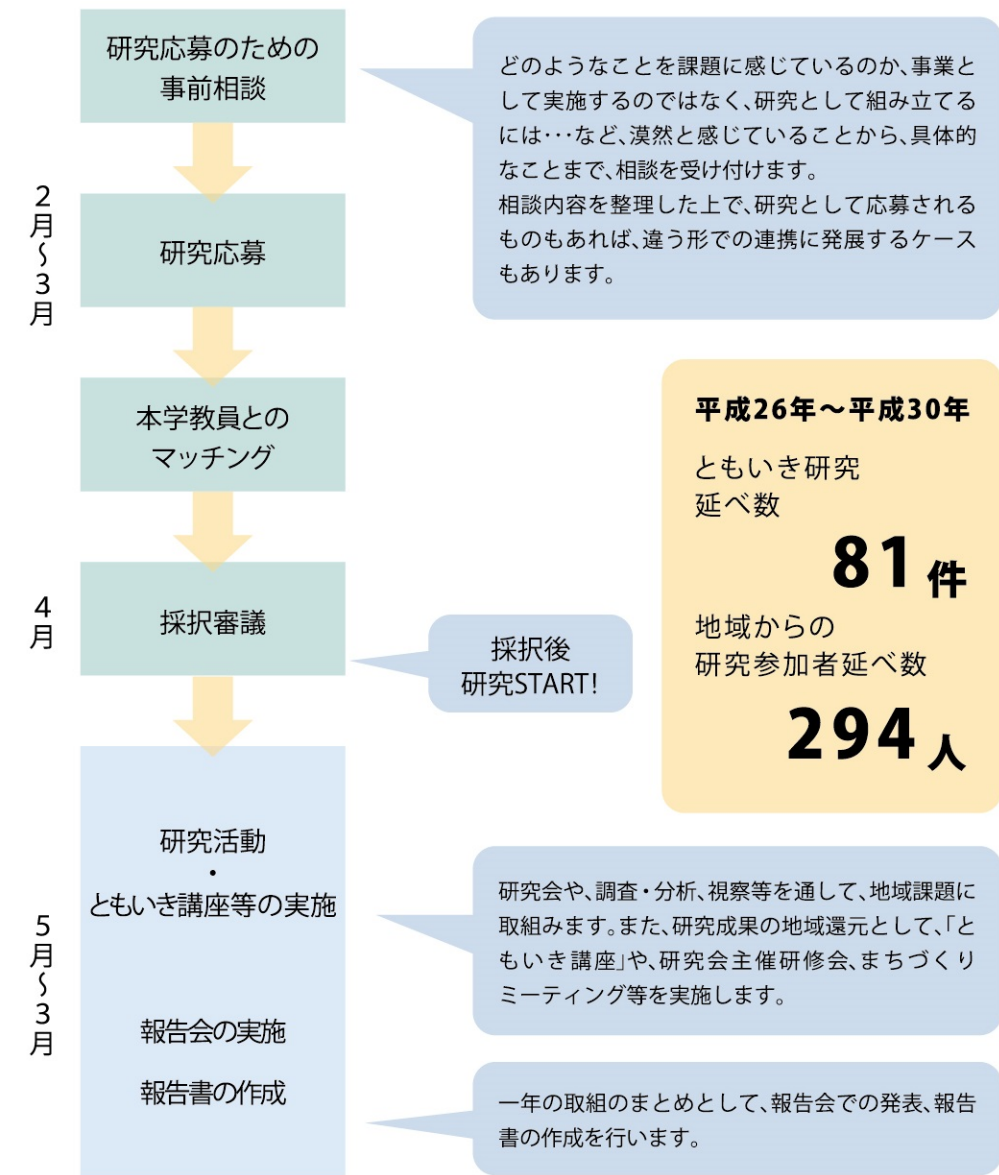
地域における本学の教育、研究、社会貢献活動を一体化し、その成果を本学の教育活動や地域の発展に還元、寄与することを目的に、平成26年度から始まった「地域志向協働研究」・「地域志向教育研究 ともいき研究助成事業」。(以下、両研究の総称として「ともいき研究」と表記) 本学の学問特性を活かし、地域福祉、保育、教育、まちづくり、観光、地域コミュニティ、防災など、様々な分野の研究をこれまで行ってきました。

「ともいき研究」では、本学教員のみならず、地域の方からも研究を募集し、本学教員とのマッチングを行うことで、共同研究を行っています。地域の方々が感じているニーズや課題、大学と協働したいと考えている事項を把握する機会ともなっています。また、各研究テーマに基づいた「ともいき講座」(公開講座)やまちづくりミーティングを開催し、地域課題の共有、研究成果の地域還元にも努めています。

大学の持つ様々なリソースを活かしながら、住民、企業、行政、各種団体等、地域パートナーと協働して、地域の課題に取り組んでおり、今年度は、15の共同研究プロジェクトが採択されました。

次ページからは、今年度採択された研究の概要と、共に研究に携わる研究分担者や協力者の地域パートナーの皆さんをご紹介します。

■ともいき研究の流れ



平成26年～平成30年
ともいき研究
延べ数
81件
地域からの
研究参加者延べ数
294人



プロジェクト1
ともいき研究・住民参画型

グローバル化時代における地域の国際協力のあり方を探るII

研究代表者：安田 ひろみ (総合社会学部総合社会学科 准教授)

地域パートナー
沖野 縁さん
(京都市住宅供給公社 向島学生センター)

「英語がちゃんと話せなくてもコミュニケーションには問題ない。伝えたいと思う気持ちの方が何倍も大事。いろいろな人と話すことで価値観が変わった。世界を身近に感じるようになり、無意識に国際情勢や海外のニュースに耳を傾けるようになった。」センターの入居者から寄せられたコメントです。現在センターには、34ヶ国210世帯の学生や研究者が居住し、様々な言葉が飛び交っています。このコメントのように、地域コミュニティでも、言葉の壁を越えて異文化交流ができればと思います。

プロジェクト2
ともいき研究・住民参画型

地域と大学の連携による防災・減災の取り組み

研究代表者：澤 達大 (総合社会学部総合社会学部 准教授)

地域パートナー
西山 正一さん
(宇治市横島東地区防災対策会議役員)

「災害は忘れず、必ずやってくる」「自助、”近助”、共助が重要」これまでの宇治市内での防災講演では、地域防災を進める上で、地域の歴史に学ぶことと、近隣のコミュニケーションを取ることの重要性を、幅広く伝えてきました。今年度は、学生の皆さんとともに「マイ防災マップ」を作成する予定です。この地図が地域住民をつなげるツールとなり、防災に寄与することを期待しています。

プロジェクト3
ともいき研究・住民参画型

障がい当事者のリソースを活用した教育とまちづくりに関わる実践的研究

研究代表者：吉村 夕里 (臨床心理学部臨床心理学科 教授)

地域パートナー
日置 貞義さん(山城北圏域障害者自立支援協議会就労部会役員 (南山城学園障害者就業・生活支援センターはびねすセンター長))

山城北圏域障害者自立支援協議会就労部会では、障がい者の就労支援ネットワーク構築、啓発啓蒙活動を主に取組んできました。28年度より小学4年生から中学3年生における就労体験の必要性と、その体験ができる企業の理解促進を通じた“共生社会作り”を目標に活動してきました。当研究に参加させていただき、当事者を通じた就労支援の在り方の一つ(障がい児の就労体験事業)として創り、地域へ還元できるよう取組んでまいります。

防災に問題意識をもつ本学研究員を中心にそれぞれの専門領域で研究を進めています。そのため、研究内容も「災害弱者の避難所運営」「災害時コミュニケーション」「危機管理の取組」「社会心理学から考える防災」など、幅広く及んでいます。

多岐に及ぶ取組の中で、地域住民の皆様と協働で進めているのは、横島東地区のマイ防災マップ作成です。これは、横島東地区防災対策会議の皆様と本学学生が中心となり、宇治市危機管理室や国土交通省淀川・伏見出張所「河川レンジャー」のご協力を受けています。9月に開催予定の宇治市防災訓練では、本学プロジェクト科目履修学生が中心となり、マイ防災マップの成果が展示される予定です。

研究の目的は、従来から行われてきた障がい当事者が学生や援助専門職の社会福祉教育に参画する取組と、障がい当事者の個性や特性を生かしたまちづくりの取組との連携を深める中で、障がい当事者の視点を生かした教育やまちづくりのナレッジデザインを開発することです。具体的には、本学における障がい当事者の教育参画の取組と、向島ニュータウン地域における障がい当事者や関係者が参画するまちづくりの取組や、山城北圏域における障がい者就労支援ネットワークの取組との連携を深め、協働事業を実施することにより、障がい児者のリソースを活用した教育とまちづくりに貢献することを目指しています。

プロジェクト4
ともいき研究・住民参画型

アディクション問題への
新たなアプローチについての探索的研究


学内研究員
1名
学外研究員
2名

研究代表者：松田 美枝（臨床心理学部臨床心理学科 准教授）

アディクション(=嗜癮問題)は、アルコール、薬物、食べ物、ゲーム、インターネット、窃盗、恋愛、性行為、など対象が多様化していると同時に、回復の道筋も多様化しています。病院や自助グループだけでなく、嗜癮問題から回復した当事者により運営される回復施設も増えており、また、ハームリダクション(害を少なくすることを中心に据えたアプローチ)という考え方も広がってきています。アディクションは放置すると死に至る病とも言われます。本研究では、当事者が運営する回復施設の協力のもと、京都におけるアディクション問題の実情について調査する基盤を整え、また、社会の誤解や偏見を払拭すべく、公開講座を実施して普及啓発に努めているところです。

地域パートナー

加藤 武士さん
(NPO法人アバリ 木津川ダルク 代表)



回復に至るには、スピリチュアルなもの、世俗的なものなど、多様な道筋があります。アディクションからの回復は、当事者にとっても、家族にとっても、地域社会にとっても、現実そのものであり、回復は協力的な地域社会において開花します。また、回復者や回復途上にある人々は、その人自身の存在が、問題解決の一翼を担っており、当事者や家族、地域社会の人々は、回復者の背中を見ることで、アディクションの何たるかを知るのです。

プロジェクト5
ともいき研究・産官学協働型

「まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造」
—地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもの学習支援と「つながりひろば」の再構築—

学内研究員
4名
学外研究員
4名

研究代表者：寺田 博幸（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

この地域志向の教育研究も5年目を迎えています。毎週、コミュニティカフェ「Reos 榎島」では、放課後の子供達に安全・安心な居場所を提供するとともに、子供達の学習の習慣化を図るための実践的な研究を学生や地域のスタッフと進めています。学習支援だけでなく折り紙や遊びなどを取り入れて楽しい時間を過ごすように工夫もしているところです。第一、第三月曜は「つながりひろば」も開催され、食事時には子供達の元気な声が会場に響き渡っています。12月には、京都文教大学を会場に宇治市の子供達と保護者を対象にした「親と子の体験教室」を実施します。この実践的研究を通して、小学校教員養成コースの学生スタッフが児童理解について実証的に学びながら、親と子の絆づくりや子供同士、保護者同士のつながりに貢献することを目指しています。

地域パートナー

榎田 尚美さん
(Reos 榎島)



地域の課題である子供の孤立化防止のため、先生や学生スタッフとともに学習支援や食事の提供等、子供達の居場所を定期的に開催しています。コミュニティカフェ「Reos 榎島」が子供達にとって安全・安心な憩いの場として定着してきました。地元の小中学校や大学と連携し、地域が主体となり皆様に支えていただけて今日に至っています。今後も保護者や子供達の希望に少しでも応えていけるよう工夫するとともに、多方面から活動に賛同していただけるよう邁進していきたいです。

プロジェクト6
ともいき研究・産官学協働型

地域の魅力を発見・発信する子ども記者クラブ


学内研究員
2名
学外研究員
7名

研究代表者：橋本 祥夫（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

京都府南部地域は、今後急速な人口変動が予想され高齢化が進み、地域のアイデンティティや地元愛が育たないだけでなく、新しい地域の担い手を育成することが困難となっています。これらの課題を改善するため、本研究では、子ども記者クラブによる記者体験活動を手法として、地域の情報を発掘し、子ども達の目線で発信することで、子ども達自身が自分たちの住む「まち」に対する愛着をもち、地域の一員として地域に貢献しようとするシティズンシップを育成することを目的とします。子ども記者クラブの活動を通して、よりよい市民を育成するための、知識、技能、態度を身に付けられるようにしていきます。

地域パートナー

奥井 凜さん
(株式会社洛南タイムス社報道部 記者)



子ども記者は、宇治・城陽の小学生が中心です。4年目となる今年は、大人が用意したことを取材するだけでなく、取材したいことを子ども自身が探してくる取組にできればと話し合っています。希望して来ているだけあって、子どもたちはとても積極的です。大人には気がつかないネタを拾ってきてくれることでしょう。子どもたちが、ニュースを見つけ、発信する、そのお手伝いをする気持ちで、出しゃばらずに支えたいと思います。

プロジェクト7
ともいき研究・産官学協働型

宇治市における「ものがたり観光」の振興と定着


学内研究員
2名
学外研究員
4名

研究代表者：片山 明久（総合社会学部総合社会学科 准教授）

宇治市は源氏物語宇治十帖の舞台であり、その世界観を味わう観光が江戸時代より行われてきました。近年では、宇治市出身の作家武田綾乃氏による「響け！ユーフォニアム」が発表され、若いファンがその世界観を味わう観光を楽しんでいます。またその世界観の下、吹奏楽やイラスト作成など自らが表現者になって楽しむ人たちも見られるようになってきました。この研究会の目的は、これらの観光を「ものがたり観光」と名付け、それをさらに振興させる方策を検討し、宇治における「ものがたり観光」の定着を図ることです。そのために、シンポジウムの開催などを通して、両作品の魅力を多様な側面から再評価し、新たな観光の喚起につなげていきたいと考えています。

地域パートナー

多田 重光さん
(公益社団法人 宇治市観光協会 専務理事)



今日宇治には560万人の観光客が訪れ、海外のお客様も継続して増えています。しかし観光客の方々に、まだまだ本当の宇治の魅力を伝えきれているとは言えません。宇治を舞台とした「源氏物語宇治十帖」の魅力的な世界観も多くの方に楽しんでいただきたいと思いますし、近年では「響け！ユーフォニアム」ファンの方に数多く訪れていただいております。宇治観光の新しい側面に注目していただけるチャンスだと認識しています。この研究会の取組が、宇治の新しい観光の喚起につながることを期待しています。

プロジェクト8
ともいき研究・産官学協働型

未来視点を取り入れた持続可能な地域コミュニティ施策実施に向けた検討研究


学内研究員
1名
学外研究員
8名

研究代表者：森 正美（総合社会学部総合社会学科 教授）

宇治市においては、近年、町内会・自治会の加入率の低下、役員層の負担の増大や少子高齢化による担い手不足など、コミュニティ活動上の様々な課題が存在し、複雑化しています。本年度は、これまでの共同研究の成果を踏まえ、①市民活動の空間・拠点の確保についての検討、②研修・講演会の開催を通じた地域コミュニティ活動に資する人材の育成・意識啓発について、宇治市の現状の更なる分析や先進事例の分析を踏まえ、公共施設管理計画との整合性も視野にいれながら研究を行います。

地域パートナー

畑 裕子さん
(宇治市役所市民環境部文化自治振興課)



本研究では、これまでの研究成果を踏まえながら、未来視点を取り入れたワークショップの開催を通じて、地域実態に即した持続可能な地域コミュニティ施策の実現に向けて取組むとともに、地域課題について多様な主体が意見交換できる場や学ぶ機会を設け、地域コミュニティの重要性を認識し、課題解決に向けたきっかけ作りや住民の主体的な地域参加を促進することに繋がることを期待しています。

プロジェクト9
ともいき研究・産官学協働型

宇治市認知症アクションアライアンスに関する当事者研究Ⅲ
—「認知症の人にやさしいまち・うじ」の実現に向けて—


学内研究員
1名
学外研究員
5名

研究代表者：平尾 和之（臨床心理学部臨床心理学科 教授）

高齢者の5人に1人が認知症を患う時代を迎えるにあたって、認知症と共に生きていく社会の実現が課題となっています。宇治市は全国に先駆けてこの地域課題に取組み、2015年に「認知症の人にやさしいまち・うじ」を実現することを宣言しました。2016年より始動した宇治市認知症アクションアライアンスでは、認知症のご本人やご家族の体験にもとづいたニーズや評価をいかに施策に反映していくかがテーマになっています。本研究では、宇治市、宇治市福祉サービス公社、洛南病院、そして認知症当事者チームと協働し、認知症当事者の声を聞き取り活動していく方法論の確立を目指します。

地域パートナー

森 俊夫さん
(京都府立洛南病院 副院長)



3年目を迎えた本研究の飛躍に期待します。「認知症のひとにやさしいまち・うじ」の実現を推進する「れもねいど」の核を形成するのが「認知症当事者の視点」になりますが、「グループミーティング」2年間の蓄積が、その核を大きく醸成しました。世代を超える象徴としての学生の存在と大学という場の透明性が、参加者の拡がりや深化を生みだし、企業や京都認知症総合センターとの協働も視野に入りました。次の時代の「拠点」です。

プロジェクト10
ともいき研究・産官学協働型

持続可能な地域社会の形成における
市民主体型協働組織の活動効果測定手法の検討

学内研究員
1名
学外研究員
7名

研究代表者：石田 浩基（地域協働研究教育センター 専任研究員）

本研究では、市民主体型協働組織の活動や運営について適切な効果測定や検証を行うための手法について検討します。持続可能な地域社会において、市民活動は不可欠なものです。特に、市民ボランティアが無償で運営している団体においては、活動が長期化することによって、活動目的を見失ったり、自己肯定感や意欲が薄れてしまうことで、活動の停滞を招きかねません。本研究では、活動の効果を可視化し、測定することで、市民活動および地域の活性化を目指します。あわせて、市民活動を目的とした連続講座を実施することで、これを目指し、市民団体同士のネットワーク形成の一助にもなればとも考えています。

地域パートナー

居原田 晃司さん
(宇治市地球温暖化対策推進パートナーシップ会議 会長)



宇治市の地球温暖化を防止するために具体的取組を市民、事業所、宇治市が3者協働して実行する任意団体『宇治市地球温暖化対策推進パートナーシップ会議』は設立10年を迎えます。設立当初よりさまざまな活動で実績を積んできましたが、まだまだ発展途上な点が多い団体です。この取組で効果的な告知方法、会員のさらなる意識向上、活動できる場の増加など問題点を改善し、ますます活躍していくことを期待します。

多文化多世代共生の地域コミュニティを考える
—大学・事業者・住民連携による
ニュータウンまちづくり推進事業を中心とした実践的研究

学内研究員
7名
学外研究員
4名

研究代表者：杉本 星子（総合社会学部総合社会学科 教授）

プロジェクト11
地域志向協働研究

本学に隣接する向島ニュータウンでは、2017年度より京都市と地域の住民や事業者そして大学が連携して「向島ニュータウンまちづくりビジョンを推進会議」を進めています。向島ニュータウンは公営住宅が6割以上を占めることもあり、京都市の平均より少子高齢化が進み、子どもの貧困問題も深刻化しています。さらに高齢単身者や障がい者、中国帰国者や外国籍住民といった非日本語母語者の人口も多いため、災害時の情報伝達や救援体制づくりが急務となっています。本研究では住民とともにこうした地域課題に取り組みながら、多文化多世代が共生し協働できるコミュニティづくりについて考えていきます。

地域パートナー

村井 繁光さん
(京都市伏見青少年活動センター 所長)



『多様性こそ力！共生こそ希望！』。京都市伏見青少年活動センターは、事業の柱の一つに多文化共生の啓発を掲げています。プログラム活動を通して考え行動することで、他者を慮ることのできる感性を身につけた大人へと成長していることを実感しています。これからも他者を慮ることができるセンス(感性)が磨かれるセンターを目指していきます。また、中学生学習支援や京都文教マイタウン向島(MJ)でのユースセンターを中心とした子ども・若者の居場所づくりにも取り組んでいます。

宇治市における観光の質の向上方策検討研究
—インバウンド対応の質的向上を中心に

学内研究員
3名
学外研究員
4名

研究代表者：森 正美（総合社会学部総合社会学科 教授）

プロジェクト12
地域志向協働研究

宇治市においては、平成25年に「宇治市観光振興計画」を策定し観光まちづくりに取り組んでいます。観光交通対策、サイン計画など個別課題についても効果的な対応にむけて努力してきました。しかし計画のなかで謳われている「観光の量から質への転換」が十分に実現できていないと、とくにインバウンド対策についてはかなり遅れています。日本では平成25年以来インバウンドが急増し、その傾向は今日まで継続しています。しかしそれに伴う問題や変化が早くも現れています。他地域のインバウンド対策などを中心に学び、宇治市における対策の課題と方向性を整理します。

地域パートナー

柯 慈樹さん
(宇治市市民環境部商工観光課 課長)



本年度より宇治市観光振興計画後期アクションプランがスタートしました。策定過程においては、インバウンド対応についての議論があり、新たな観光戦略として「外国人観光客(インバウンド)対策の強化」を掲げることになりました。今回の研究により海外から宇治市を訪れた旅行者の方々、再び宇治を訪れようと思っていただいたり、宇治の観光情報を海外で拡散していただけるような満足度を上げる手法について協同で研究したいと考えます。

プロジェクト13
地域志向協働研究

高齢者ケアに焦点をあてた
多職種相互乗入型の研修プログラムの開発に関わる研究

学内研究員
3名
学外研究員
6名

研究代表者：吉村 夕里（臨床心理学部臨床心理学科 教授）

少子高齢化社会の中で、制度の谷間に置かれた高齢障害者の地域ケアの問題や、認知症高齢者の介護を高齢のご家族(老老介護)や、障がいを持つご家族(障老介護)が担わざるを得ないという深刻な介護問題が発生しています。本研究では、障がい福祉サービスと介護保険サービスのスタッフたちが協働して、事例検討会や研究会を実施すると共に、アクティビティの実施とおして、認知症高齢者や高齢障がいの人の能動性を保障するためのアセスメント方法の開発を目指します。また、援助専門職、住民や学生を対象とした公開事例検討会や研修会を実施して、多職種相互乗入型の高齢者ケアの在り方を検討します。

地域パートナー

森田 浩史さん
(NPO法人おはな 代表)



当法人は、認知症などの困りごとが少なくなり自分の地域での生活が継続できるための支援をするために設立され、現在は民家を改修した少人数のデイサービスと、認知症の啓発活動を中心に運営をしております。高齢者一人ひとりのことを知り、主体的に過ごしていただける人と物の環境を用意することで、その人らしい人生を歩んでいただけることを目指しております。これから関わる研究によって新たな活動の可能性を見出し、働く者にとっても有意義な研修プログラムが開発できることを目指したいです。

プロジェクト14
地域志向協働研究

「遊び」を介して行う、子育て・子育てのフィールドワーク研究

学内研究員
5名
学外研究員
1名

研究代表者：柴田 長生（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

「遊び」は、保育士がいちばん得意とする分野です。また「遊び」は、子どもそのものです。保育士をめざす学生と教職員が共同で活動している「遊びの実践研究会」を活動母体として、地域内にある子どものために様々な場所へ「遊びの出前」を行うことにより、そこでの子どもたちや子育て支援関係者と交流し、「子育て・子育てのためのフィールドワーク」を継続実践していきたいと考えています。総合的な子育て・子育て支援を、主に「遊びの提供」を媒介にして追求していきます。そしてそのために有効な、「遊び」の開発・研究・蓄積を研究していく所存です。地域のニーズも発掘していきます。

地域パートナー

林 友樹さん
(子ども食堂「つなぐ」代表)



活動を始め10ヶ月。地域の方々の協力により、継続して活動することが出来ました。しかし、まだまだ私の考える「子ども食堂」の在り方に至っていません。現在の社会では、子どもと大人との関わりが希薄です。そのため、継続して子どもと大人が関われる場所で基本的信頼関係を築き、対話を通して困りごとや気持ちを発信し、経験値を高める機会を提供し、肯定的な評価を得られる場所になるように「遊びの出前」も活用し、「子ども食堂」を行っていきます。

プロジェクト15
地域志向協働研究

「宇治学」副読本作成による地域協働型教材開発と
評価・改善に関する実証的研究

学内研究員
5名
学外研究員
3名

研究代表者：橋本 祥夫（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

宇治市全市の小中学校で実施する総合的な学習の時間「宇治学」の副読本は、第1期分の3年生と6年生の副読本が平成28年度、第2期分の4年生と7年生(中学1年生)の副読本が平成29年度に完成し、現在使用が開始されています。今年度は、第3期分の5年生、8年生(中学2年生)、9年生(中学3年生)の3学年の副読本が完成予定であり、全ての学年の「宇治学」副読本が完成することになります。宇治市教育委員会と連携し、副読本の完成を目指すとともに、研究協力校を中心に、副読本を活用した授業実践と地域協働型での教材開発、また、学習効果の実証的検証を行い、地域協働型学習のモデル化を目指していきます。

地域パートナー

上口 俊幸さん
(宇治市教育委員会一貫教育課総括指導主事兼教育振興係長)



本市の『宇治学』副読本の作成において、京都文教大学との共同研究も今年で5年目を迎えます。「宇治で学ぶ」「宇治を学ぶ」「宇治のために学ぶ」ことをコンセプトとしている『宇治学』です。『宇治学』副読本を活用した児童・生徒たちが、ふるさと宇治のことをより深く知り、そして、さまざまな課題に対して目を向け、主体的、創造的、協働的に取り組み、課題解決の能力を高めてくれることに期待しています。






学生が自ら、地域の課題を見つけ、その解決策を模索する取組み 地域連携学生プロジェクト

文部科学省の2007年度「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択された「現場主義教育充実のための教育実践～地域と結びフィールドワーク教育～」の取組では、これまで多くの学生が参加し、継続的に取組んできた教育プログラムとしての地域貢献活動が非常に高く評価されました(2007年度～2017年度採択プロジェクト数:延べ78団体)。本学では、その取組を継続・発展させた学生全体の地域連携プロジェクト活動をさらに推進し、学びと地域貢献を両立させる場として積極的に創出しています。

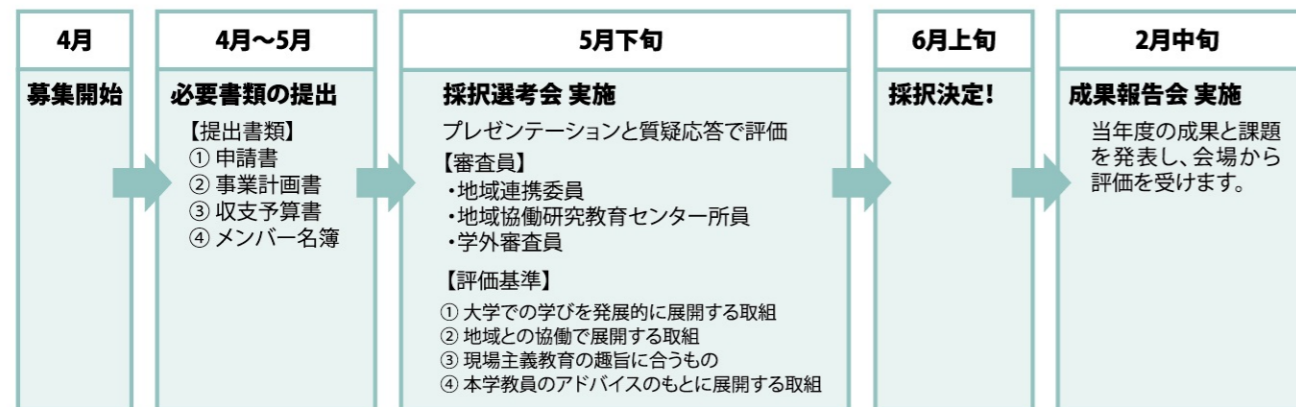
「地域連携学生プロジェクト」は、地域を対象とする学生の自主的活動のなかから、地域特性を活かしつつ、成果が期待できる取組みをプロジェクトとして選定し、支援、助成しています。

地域に根ざし、地域に学び、地域への貢献を目指す本学の教育研究目標を達成するために、まちづくりや地域おこしなどへの学部、学科を超えた主体的な取組として、2018年度は4つのプロジェクト(継続3件、新規1件)が採択され、現在活動を進めています。

今回は、今年度採択のプロジェクトを、活動の概要とプロジェクトメンバーとして活動を行う学生たちのコメントを中心に紹介します。

※    のマークがついている団体は、SNSで活動を発信しています。
( : Facebook  : twitter  : Instagram) 検索いただき、ぜひ最新情報をご覧ください。

地域連携学生プロジェクト 採択までの流れと年間スケジュール



宇治☆茶レコジャー

学生が宇治茶について学び、そこで気付いた宇治茶の魅力を広く地域に発信していくプロジェクトです。地域にも根付いてきている「宇治茶スタンプラリー」の実施をはじめ、宇治茶に触れるイベントやお茶の淹れ方のワークショップなどを展開していきます。これまでも実施してきた「聞き茶巡り(参加者がお茶屋さんを巡り、店主さんとの会話と美味しい宇治茶を味わうイベント)」を、一昨年度から学生ガイド付きのツアー形式に変更し、より観光とリンクした催しとなりました。また、本年度は今まで行ってきた淹れ方のワークショップを学童保育等で行い、次世代のコアな宇治茶ファンの育成を目指します。



最新情報はこちら   メール:ujichale@gmail.com

参加学生の声



宇治☆茶レコジャー 代表
内田 知之介 (臨床心理学部 臨床心理学科 2年次生)

宇治☆茶レコジャーは、今年度で9年目の団体です。宇治茶を通じて宇治のまちの魅力を広めていく活動をしています。僕自身も初めて急須で淹れた宇治茶を飲んだ時に、その魅力の虜になりました。もっと気楽に多くの方に、実際に飲んでその魅力に触れて頂くことを目標にしています。いつもご協力頂くお茶屋さんや地域の方の声を大切にしながら、チャレンジ精神を持って様々な活動に取り組んでいきます。

商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas

私たちは宇治橋通商店街振興組合のご協力のもと、商店街の活性化活動に取り組んでいます。昨年度に引き続き、写真を撮りながらゲーム感覚でまちあるきを楽しむことが出来るイベント「宇治ロゲイニング」にさらに工夫を加え、今後も長期継続的に実施していきたいと考えます。さらに、商店街イベントへの参画や、学生目線で店主さんとお勧めの商品を紹介する「イチ押しプレート」の作成、商店街の公式ホームページの更新にも携わっていきます。今年度も多くの新生を迎え、それぞれが楽しみながら活動に取り組んでいきます。



最新情報はこちら   メール:canvas.uji@gmail.com

参加学生の声




商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas 代表
中村 太海 (総合社会学部 総合社会学科 3年次生)

CanVasは「地元の商店街を元気にしたい」という学生の思いから結成された団体で、今年で5年目を迎えます。私がこの活動の中で、印象的であったことは、イベントの告知やメンバー紹介を掲載しているパンフレットを作成したこと。掲載内容やデザイン等、イチから企画し、そして完成したものを商店街各店舗に配りました。店主さんからは「次の冊子がほしい」などのお声をいただき、嬉しさと達成感を味わいました。これからも学生自身が成長を感じながら、地域に貢献できるような活動をしていきたいと思っています。

響け！元気に応援プロジェクト

宇治を舞台にしたアニメ作品「響け！ユーフォニアム」を通して、地域とアニメファンをつなげる取組みを行っています。活動内容はプロジェクト発足当初から実施しているファンを対象にしたキャラクターの誕生日イベント、地域の子どもを対象にしたワークショップ、聖地巡礼を目的に宇治へ訪れたファンの居場所作りなどにも力をいれています。また宇治市(商工観光課)、宇治市観光協会をはじめ地元商店街や企業と連携しながら行政への提案や企業主催の関連イベントへの協力なども積極的に行っています。そして「地域ぐるみで作品を応援」をドンドンしていきます。



最新情報はこちら  ブログ: <http://hibikejoinus.blog.fc2.com/>
メール:hibipii@gmail.com

参加学生の声



響け！元気に応援プロジェクト 代表
増谷 寛孝 (総合社会学部 総合社会学科 3年次生)

響け！元気に応援プロジェクトもおかげさまで4年目を迎えることが出来ました。私たちの団体はアニメ「響け！ユーフォニアム」の舞台である宇治で地域の方やファンの方に楽しんでいただけるようなイベントの企画・考案をし、運営しています。最近では、ファンの人からのアイデアをイベントに起用したり、カフェを開いたりなど新しいことにも挑戦しています。また、2019年の春には、劇場版も公開されるので、宇治を精一杯盛り上げていこうと思います。

KASANE O (カサネオ)

「ファッション」を通じて幅広い世代が交流できる場を提供することを目的に、今年度新たに結成したプロジェクトです。着なくなった服(若い頃に着ていた服)を「思い出」と共に、高齢者から提供いただき、それに学生が今の感覚で着こなしを考え、ファッションショーや展示会、雑誌などで紹介していきます。服を「物」としてだけでなく持ち主の「思い出」という付加価値を付け発信することで、人とひとを繋ぐ媒介物となり、超高齢社会といわれる今、世代を超えた地域コミュニティの形成に繋がると考えています。



最新情報はこちら   メール:kasaneo.2018@gmail.com

参加学生の声



KASANE O 代表
渡邊 綾乃 (総合社会学部 総合社会学科 3年次生)

私は古着屋などに興味があります。周りからはお金や時間の無駄遣いと言われることもあります。本当に無駄なのかなと思っていましたが、このプロジェクトをすることで興味のあることを活かすことができました。また、私は宇治市高齢者アカデミー4期生のサポーターをさせていただいたことなどから、自然と高齢者と関わるようになりました。高齢者の方々とお話しすると、色んな知識を得ることができたり、励ましてもらったりと新しい発見がたくさんありました。しかし、高齢者との関わりを持っている学生は私の周りにはあまり多くいません。このプロジェクトをきっかけに繋がってほしいと思います。

地域を拠点に活動するプロジェクトは他にもいっぱいあります！

地域で活躍する学生たちの取組紹介

前項で紹介した地域連携学生プロジェクトの他にも、本学には地域へ出て、地域と活動する学生団体が多数あります。学内のサークルや、学生や地域住民からなる実行委員会形式のもの、また、本学教員が顧問を務める研究会から発足したものなど形式は様々です。本学のある宇治市や、最寄り駅のある京都市伏見区を中心に、地域のニーズや課題に併せた取組が行われています。ここでは、それらの地域活動の一部を紹介します。

掲載プロジェクト以外にも、地域の町内会や自治会からの依頼を受け、夏祭りや地蔵盆、お楽しみ会などへの出演・出展も多く、沢山の学生が地域と関わる機会を持っています。



↑本学軟式野球部による「子ども野球教室」の様子

修学旅行サポートプロジェクト たび旅

観光のまち宇治には、毎年沢山の修学旅行生がやってきます。そんな修学旅行生を受入れ、学生たちが地域ガイドを務めるプロジェクトが「たび旅」です。2006年より実施している取組で、学部や学科、学年を越えた学生たちが参加しています。世界遺産の平等院、宇治上神社をはじめ、近隣商店街や源氏物語など、宇治の観光や文化を学び、自分たちが面白いと思う宇治のまちの魅力を中学生、高校生に伝えています。また、スケッチブックにイラストやポイントとなる言葉を書き、それを示しながら話すなど、伝え方にも工夫を凝らしており、年齢も近く、親しみやすい学生ガイドは、根強い人気があります。



修学旅行サポートプロジェクト たび旅
松井 優菜（総合社会学部 総合社会学科 2年次生）

1年次生時の授業内で紹介された「文教 menu」の中でこのプロジェクトを見つけ、ツアーコンダクターのような体験がしてみたくて参加しました。初めての体験だったので、宇治の魅力をわかりやすく相手に伝えることはとても難しかったです。今回は先輩の説明の仕方を参考にしつつ取組みました。また説明の合間に勉強や部活動の話などとして、コミュニケーションをとることも忘れないように心がけました。次の機会があれば、さらに自分なりに工夫して説明できるように頑張りたいです。

参加学生の声



大学訪問受け入れ隊

近年、キャリア教育の一環として、大学見学を実施する中学校が増えてきています。京都文教大学でも宇治市内をはじめとする近隣市町村の中学校から大学見学の要望をいくつか受けています。その際、案内役を務めるのがこのプロジェクトのメンバーです。中学とは授業時間も教室も成績の付け方も全く違う大学。現役大学生がキャンパスを案内し、中学生の質問に答えます。大学受験はまだ少し先ですが、大学への興味を持ってもらえるよう、自分たちが今取組んでいること、高校生の時に考えたことなど、ありのままの大学生活を伝えています。



大学訪問受け入れ隊
小山 翔（臨床心理学部 臨床心理学科 2年次生）

中学生案内をしてみても、自分が思っていた以上に、僕が今通っている京都文教大学について知らないことが多いということに気づきました。学内にある子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」についても、この取組に参加することで詳しく知る事ができました。案内中に、中学生の生徒たちと話していて、大学でとれる資格のことなどの質問も多く聞かれます。この質問から、中学生の大学訪問が、生徒たち自身の将来について考えるきっかけになっていると感じられ、とても誇りに思います。

参加学生の声



ママさんサポーター

本学教員が代表を務める「助け合いの子育てネット」による、3歳未満の乳幼児を抱えたご家庭を支援する取組で、今年度で16年目を迎えました。学生が、サポーターとして週に1回2時間、受入れ家庭に訪問し、お母さんの目が届く範囲で、簡単な育児補助等を行います。母子の気分転換の機会をつくるとともに、学生が子育ての現場を少しでも経験し、自身の将来の子育てをよりよくすることも目的としています。「ママさん(現場者)」と「サポーター(未来の育児者)」双方が助け合い、子育てをよりしやすくなる環境づくりを目指します。



ママさんサポーター
宮下 伊吹（臨床心理学部 臨床心理学科 1年次生）

ご家庭に同じ、主にお子さんの遊び相手をしたり、一緒にお出かけをしたりしています。お母さんからは、育児のことや出産のこと等、貴重なお話をたくさん伺っています。お母さんもお子さんも、私たちが来てくれることを嬉しく思い、いつも歓迎してくださいます。

普段、小さな子どもと接する機会がないため、失敗することもたくさんありますが、お母さんの子どもに対する接し方を見て、子どもが今何を求めているのかをしっかりと考えて、接し方を学びながら、関わっていきたくと思います。

参加学生の声



遊びの実践研究会

本研究会は、教育福祉心理学科保育課程で学ぶ学生らが中心メンバーとなり、「遊び」について考えたり、自ら童心にかえり遊ぶ事を体験しています。活動目的は、遊びの面白さをとことん追求し遊びの引き出しを持つために、保育者としての技術や子どもが好む遊びについて考えられる機会を増やす事です。

学内を飛び出し地域での活動場所も増え、これまでに保育園等や児童館に出かけワークショップを開いたり、イベントを盛り上げる機会を頂きました。今後も地域の子とも達とふれあう機会を多く持ちたく皆様にお会いできる事を楽しみにしております。



遊びの実践研究会 代表
大槻 由紀（臨床心理学部 教育福祉心理学科 4年次生）

3年次から、大学近辺の「子ども食堂」へ出かけ、子どもや地域の方と食卓を囲んだり、月1回のお誕生日会企画の運営を行っています。クイズをしたり、手作り玩具をプレゼントする等を盛り上げてきました。また、茶道部に所属しているので、子ども達にもお茶に触れる体験をして欲しく茶会も開きました。懸命に茶を点てる姿や楽しい表情など、いつもと違う子ども達の姿が見られました。夏には琵琶湖へキャンプに行き、湖水浴やカレー作りなどの催しを楽しみながら更なる関係性を深めていきたいです。

参加学生の声



子ども学習支援

一般社団法人マキシマネットワーク、NPO法人まきしま絆の会、宇治市と本学が連携し、地域を志向した教育研究を行っています。毎週月曜日の放課後、会場のコミュニティカフェ「Reos 榎島」では、子ども達と学生の熱気に包まれ、学習支援に一段と力が入ってきます。また、本研究につなぐ「子どもつながり食堂」の教育研究を通して、こども教育心理専攻生を中心とした学生スタッフが児童理解について実証的に学びながら、子どもと信頼関係を構築し、親と子の絆づくりや子ども同士、保護者同士の「つながり」に貢献することを目指しています。



子ども学習支援
長岡 百香（臨床心理学部 教育福祉心理学科 3年次生）

私の中でこの活動はとても楽しく学びの多いものであると感じています。なぜかという、子ども達と一緒に宿題をしたり、遊んだり、食事をしたりする中で子ども達と多くの関りがあるからです。私はこの活動の他にも小学校でボランティア活動していますが、学校の中での子ども達とは異なった様子を見ることが出来ます。週に1回という短い時間ではありますが、参加する回数を重ねるごとに子ども達との信頼関係も深まり、以前よりたくさんお話してくれる子どもが増えてきてとてもうれしく感じています。

参加学生の声



すきっぷプログラム

すきっぷプログラムでは、発達障がいを抱え、学校への適応や対人関係につまずいている小学2年生から4年生の子どもと保護者を対象としたグループ療法を心理専門スタッフのもと、学部生・院生が中心となって行っています。子どもたちは、遊びや運動、グループ活動を通して自信や協調性を高め、子どもたちの全般的な発達の支援となることを目指しています。また保護者に対しては、親同士の交流の場を提供し、日常生活で周囲の理解や協力が得られず孤立しやすい親たちの情緒的支援を目的としています。



参加学生の声



すきっぷプログラム
橋 瑠子 (臨床心理学研究科 博士前期課程 2年次生)

すきっぷの活動をする中で、スタッフ同士で連携をとることがいかに大事で難しいことなのかを学びました。子どもたちが活動に参加する際、スタッフ間の空気感は自然と出るもので、連携が上手くいっていない時は子どもたちにもその空気感が蔓延し、上手くいっているときは楽しい雰囲気になりました。子ども同士のつながりをサポートしながらも、スタッフ間のつながりや、親同士のつながり、それぞれの立場でつながりを学んでいます。

大学れもねいど

「れもねいど(Lemon-Aid)」は、宇治市の認知症事業のイメージである「れもん(Lemon)」に「手伝う・援助する」という意味を持つ「えいど(Aid)」という単語を組み合わせたネーミングです。私たちは「れもねいど」に参画し、認知症当事者の方々のグループミーティングやお茶摘み、大学れもんカフェなどに取組んでいます。認知症当事者の方々のコラボレーション活動・研究を行い、「認知症にやさしい地域」を実現するために、専門分野の現場に入りながら、地域に根ざした活動を目指しています。



参加学生の声



大学れもねいど
橋本 舞 (臨床心理学部 臨床心理学科 3年次生)

私は元々認知症に興味があった訳ではなく、「れもねいど」の活動に関わるまで認知症の印象も『記憶力が低下し少し前のことが思い出せない』『1人では何も出来なくなる』などといったマイナスな印象しかありませんでした。しかし、「認知症当事者研究グループミーティング」で認知症の当事者の方やそのご家族の方と直接お話しする機会が増えたことで、認知症とはかかってしまうと人生が終わるようなものではなく、周りの人がほんの少し手を差し伸べるだけで以前とほとんど変わらないことができるものだとなりました。

文教カフェANTENNA

「ノーマライゼーションの実現」を目標に、精神疾患をもつ方と学生が共にスタッフとしてカフェを運営しています。カフェで提供・販売しているお菓子やパンなども、宇治市や京都市伏見区にある福祉施設から仕入れています。障がいをもつ方の社会参画の機会であり、また、障がいをもつ方と働くことで、学生にとっても大きな学びの場となっています。



参加学生の声



文教カフェANTENNA 代表
三島 彩夏 (臨床心理学部 臨床心理学科 3年次生)

イベント企画・営業システムの見直しなど、よりお客様に喜んでいただけるカフェづくりを目指しています。私たちはサポートをするのではなく、学生メンバーと施設スタッフさんともに声を掛け合いながら活動しています。ノーマライゼーションの実現という理念の中で、人と人との間にある壁にも焦点をあてながら、イベント企画や交流を通して様々な人とつながり、よりよいANTENNAになるよう取組んでいます。

京都文教大学バスツアーズ

大学に隣接する向島ニュータウンは、高齢者の一人暮らし世帯が多く、住民同士のコミュニケーションも希薄になりつつあります。一人暮らしの高齢者に、外へ出て他の住民と交流する機会を、と始めたのが本プロジェクトです。学生がバスツアーを企画、参加者の意見をもとによりよいプランを作り、ツアー当日は添乗員を務めます。今では向島在住の中国帰国者や福島からの避難者の方々にも参加いただいています。今年度も、(公財)大学コンソーシアム京都/京都市「大学地域連携創造・支援事業(学まちコラボ事業)」の採択を受け、地域のお祭りへの参加など幅を広げて活動を行います。



参加学生の声



京都文教大学バスツアーズ 代表
坂本 有梨沙 (総合社会学部 総合社会学科 3年次生)

私は、この活動で世代の違う方とたくさんお話ができるようになったことが嬉しかったです。最初は何を話していいかわからず緊張してしまいあまり話せなかったのですが、回を重ねるにつれて、世間話や趣味の話等、様々な話をするようになりました。また、まちでお会いした際に挨拶をするようにもなりました。活動をしていく中で、高齢者の方がツアーを楽しんでいただくために、どんな場所が良いか、歩いていくのに大変な場所や距離ではないかを考えながらツアーを作れるようになりました。

京都文教大学多文化交流プロジェクト

向島ニュータウンとその周辺地域には在日外国人や中国帰国者、京都の大学に学ぶ留学生が多く居住されています。しかし、私たち学生や地域住民との交流はまだ少ない状況です。その理由のひとつに、「日本語が話せない」ことが、コミュニケーションの不足を招いていると考えました。このプロジェクトでは「留学生がつなぐ」をテーマに、学生たちによる留学生向けの日本語教室を中心に、留学生と一緒にワークショップや交流会等を行い、大学生・留学生・在日外国人を含む地域住民が一堂に会し、相互理解を深めることを目指します。



参加学生の声



京都文教大学多文化交流プロジェクト 代表
大西 喬太 (総合社会学部 総合社会学科 2年次生)

「日本語教室」では国籍も年齢も異なる人たちが、アットホームな雰囲気のなか日本語を勉強しています。日本語を教えるだけでなく、お互いの国の文化や言語を教え合いながら、貴重な異文化交流の場となっています。この活動をしていてうれしかったことは、日本語の説明が上手くできたときに、「わかりやすいです」「いい先生ですね」と学習者の方から言ってもらえたことです。活動を通じ日本語教師の役割の重要性と大変さを認識すると同時に、やりがいを感じています。

文教ストリートプロジェクト

大学近郊に位置する向島ニュータウンでは、核家族化や少子高齢化が進行し、子どもや高齢者の支援が求められています。本プロジェクトは、子どもの支援のため、向島ニュータウンセンター商店街内にある地域コミュニティスペース「京都文教マイタウン向島(MJ)」で、週1回、小学生を対象に勉強会を開催しています。ここでは、主に子どもたちに宿題を教えながら、一緒に時間を過ごしています。宿題が終わったら、みんなで遊び、この勉強会が子どもの居場所となるよう、活動に努めています。



参加学生の声



文教ストリートプロジェクト
山根 由希 (臨床心理学部 臨床心理学科 4年次生)

低学年から高学年まで、さまざまな子どもたちが参加してくれています。一緒に勉強したり遊んだりコミュニケーションをとる中で、改めて子どもたちの個性と多様性を感じ、それ故の難しさもありますがやりがいや楽しさも感じます。特に遊びの中では、今までに知りえなかった子どもたちの顔が垣間見えることがあり、勉強だけでなく遊びも大切にしています。子どもたちの世界を大切に見守ることを心掛け、子どもたちにとってひとつの居場所となるよう取組んでいます。

企業訪問から地域企業の役割を学ぶ！「プロジェクト科目(地域)」 【企業と考える地域づくりクラス】

科目担当教員：石田 浩基(京都文教大学地域協働研究教育センター専任研究員)

企業は日々の企業活動の中で、どのような地域貢献を果たしているのでしょうか。また、地域にとって企業の役割とはどのようなものなのでしょうか。企業の地域参加について学ぶ授業が、今年度春学期(4-7月)に開講されました。この授業は、京都府南部地域の中小企業および京都中小企業家同友会にご協力をいただき、学生が企業訪問を行うことで、地域社会における企業の役割や学生の関わりについて考えるクラスです。

訪問企業は、市町や業種、業態が異なるように依頼しました。1社目は、京都市伏見区で訪問看護や配食サービスを行う「(株)健幸プラス」様、2社目は城陽市の「城陽酒造(株)」様、3社目は久御山町にあるプラスチック製品のファブレスメーカー「(株)ネットプラスチック」様です。このように業種や業態の異なる企業を訪問することで、様々な企業の取組を知り、地域への参加、貢献のあり方を学生に考えさせることを重視していました。そして、肝要なのは、訪問前に行う事前学習です。学生は、それぞれの企業が所在する市町、訪問企業の会社概要、事業内容について事前に調べ、授業内で発表します。そして、その発表内容を基に、訪問時の確認事項や質問内容を考えるワークを行いました。こうした事前学習を行ったことで、地域や訪問企業に対する理解が深まり、一層充実した学びになったと感じています。

訪問を行った各社からは、地域住民や周辺企業との信頼関係を構築する経営スタンスや、地域にとっての自社の位置づけ、地域に根ざす経営者の想いや社員の働き方について、お話を伺うことができました。地域志向で、進路を思案する学生たちにとっては、どれもが為になるお話で、今回授業にご協力いただきました企業の皆様には貴重な機会をいただき、感謝の念に尽きません。

今回の訪問を通して、学生が地域企業の実態を学ぶには、企業の方に直接話してもらうことが最適であると、改めて認識しました。地域企業の協力があればこそ、充実した授業をつくることができるのだと感じており、このような協力、連携体制を今後も活かしていきたいと考えております。



京都文教ともいきパートナーズ 「行政・経済団体懇談会2018」

京都府南部地域における「高・大・地・産」接続を通じた地域人材の育成と定着促進を目指した新たな体制づくりとして、2017年度より「京都文教ともいきパートナーズ」の活動を行っています。その一環として7月9日(月)に、日頃より本学とは「連携事業」で関わり深い周辺の行政・自治体、地元経済団体が一堂に会し、これまでの各団体の取組の報告と、今後の発展的な活動に向けた懇談会を開催しました。

まず、本学よりCOC、COC+事業の取組と事業終了時期、その後の事業継続に関する現状の報告がありました。その後、京都府山城広域振興局、伏見区、宇治市、久御山町、城陽市の担当者から「若者の人材育成と定着」というテーマで、各行政の施策、および課題について話題提供も兼ねて報告を行いました。そして、それを基に各商工会議所、および京都中小企業家同友会などの地元経済団体の他、今回は本学と所縁のある京都府北部の丹後機械工業協同組合や滋賀県中小企業家同友会からも参加者があり、4つのグループに分かれて、互いの取組について情報交換を行うとともに、今後の連携の可能性と方向性について議論を行いました。

限られた短い時間の中で「これだ!」という解決策を見出すことは難しいですが、課題の解決に向けて、行政や各団体が個々に何かをするだけでなく、「地域」という大きな「面」で同じ方向を向いて邁進していくことへの重要性を共有しました。



京都文教ともいきパートナーズ×地域インターンシップ実習受講生 コミュニケーションアップ講座

7月14日(土)、本学の現場実践教育科目の一つである地域インターンシップの「コミュニケーションアップ講座」を開催しました。実習前、受講学生の不安要素の一つが「社会人とのコミュニケーション」です。この不安を少しでも解消し、今夏、実りある実習に臨めることを目標に、今回初めて社会人とのワークショップを企画しました。当日は「地域インターンシップ」履修学生からの希望者と、「京都文教ともいきパートナーズ」に参画いただいている企業の方々、そして本学教職員と約20名が参加。チームビルディングの手法を用いて、学生、社会人が混成で3つのチームに分かれ、地元食材を使った料理づくりに取り組みました。

Mission ① 作戦会議
テーマは「夏を乗り切るこの一品!」メニューと役割分担を計画。

Mission ② 買い出し
食材は、久御山町の農家さんよりご提供いただいた新鮮な夏野菜!
足りない食材・調味料の調達は、近隣スーパーへ買い出し。

Mission ③ クッキング!
役割分担しながら、各チーム計画に沿って調理。

Mission ④ ランチタイム
完成したらランチタイム!各チームともカレーがメイン料理になりました。

Mission ⑤ リフレクション
最後に各チームが振り返り、の気持ちを発表。全体で共有しました。

京都府「1まち1キャンパス」、京丹後市「夢まち創り大学」事業 「企業見学ツアー in 京丹後2018」

地方の人口流出・減少が社会問題化して久しいですが、「若者」と呼ばれる大学生未満の年代層は高校卒業の進路決定の際、「地元」のことをあまり知らずに離れてしまうことも、その一因となっているのではないのでしょうか。また「地元は田舎だから働く場所が無い」と決めつけている人も少なくないのではないのでしょうか。しかし、それは「地元」を知らないだけで、実はそれぞれの地域にも優良企業は数多く存在しています。

このツアーは8月7日(火)～9日(木)の2泊3日で実施し、1日目はCOC+事業の協力団体である丹後機械工業協同組合の協力を受け、京丹後市にあるものづくり企業3社を訪問しました。そして2日目、参加学生たちはその企業レポートをコミュニティラジオ放送局「FMたんご」にて番組を制作し、この番組は同局より後日放送されました。また、地元企業経営者(1日目夜)や「若者世代」(2日目夜)との交流会、そして3日目には京丹後市移住支援センター「丹後暮らし探求舎」へ訪問し、1ターン・Uターン者からの話を伺ったり、京丹後市の観光名所などを訪問しました。こうした住民の方たちとの交流を経て、そのまちに暮らす様々な世代の方たちの声を直接「体験」することで、「地域に暮らす」ことへの視野や選択の可能性を広げ、今後の進路選択に役立つ知識とスキルを学びました。

